

深田家は、近江源氏の武将である佐々木源三秀義（妻は源為義の娘）から7代目の佐々木三郎兵衛信輝に始まる。この信輝が、伯耆国濱中の里に来て、水深い荒地を開墾しこの地の豪士となり、「深田」を姓した。

本庭は、鎌倉時代末期に造園されたと推定される書院造りに池泉鑑賞の様式を取り入れた、池泉鑑賞蓬萊式庭園。現在は鳥取県指定保護文化財に指定されている。池の中には力強さをたたえた亀島と、女性愛を思わず鶴島が配されている。鎌倉時代に作られた全国13庭園のうち鶴亀島の原型をとどめているのはこの庭園を含めて2つだけという。



この石は、**三尊石**と称し、阿弥陀三尊を表現しています。

この三尊石とは、阿弥陀如来を真ん中とし、向って右側が観音菩薩、向って左側が勢至菩薩と

する三尊形式です。

三尊石が京都南禅院のものと類似し、鎌倉時代につくられた蓬萊庭園として、鶴亀島が原形を残しているのは、京都の西芳寺と深田氏庭園しかないと言われています。

車尾の地名

1331年（元弘元年）、後醍醐天皇が隠岐島に配流の途中、宿を提供した深田家に滞在中に歌われた『春の日の **めぐも安き 尾車のうしと思わで 暮らす此の里**』の「尾車」を入れ変えて地名となった説が有力です。